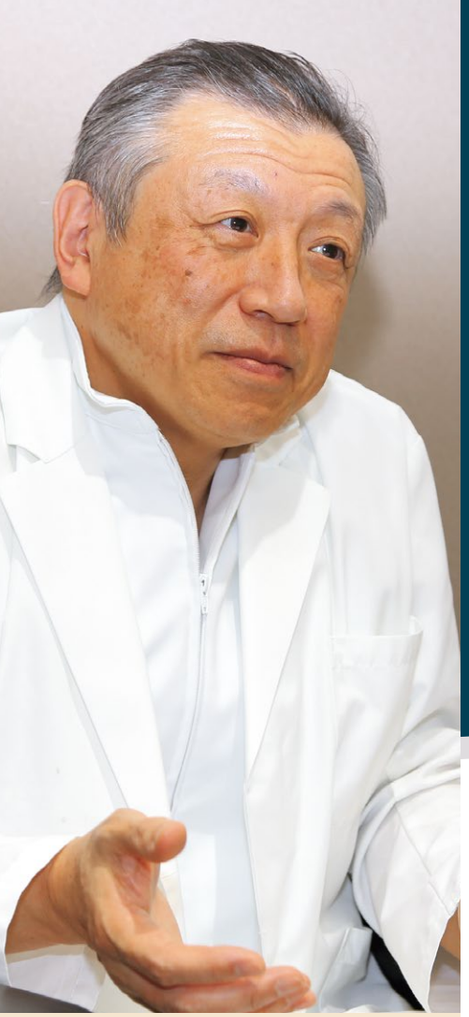
特集

スペシャリスト対談 「脳腫瘍」の現状と「陽子線治療」のこれから



社会医療法人孝仁会
札幌孝仁会記念病院院長
脳腫瘍・頭蓋底センター長
入江 伸介氏

（いりえ　しんすけ）
1965年生まれ、札幌医科大学卒。札幌医科大学臨床教授、徳島大学医学部臨床教授。日本脳神経外科学会指導医、日本脳神経血管内治療学会専門医、日本脳卒中学会専門医等。

独立行政法人国立病院機構
北海道がんセンター名誉院長
西尾 正道氏

（にしお　まさみち）
1947年生まれ、札幌医科大学卒。88年国立札幌病院北海道地方がんセンター（現北海道がんセンター）放射線科医長、2007年副院長、08年院長、13年4月から現職。日本医学放射線学会治療専門医。「市民のためのがん治療の会」顧問。

馴染みの薄い病気

西尾　こちらの札幌孝仁会記念病院には「福島孝徳脳腫瘍・頭蓋底センター」があって、入江院長は福島医師に師事されて、そのセンター長も兼務していますね。福島医師と言えば、脳神経外科で「神の手」として知られています。師事されたきっかけは？

入江　当院を運営している社会医療法人孝仁会の齋藤孝次理事長と福島先生は、もともと親交があって、福島先生は20年程前から年に2、3度、釧路脳神経外科病院で手術していました。

私も何回かお会いしている中で「私のところで勉強しないか」と誘われ、デューク大学やウェストバージニア大学で手術をさせていただきました。そこでは頭の骨の底にある頭蓋底にできた難しい腫瘍の手術を学びました。

西尾　なるほど。

入江　いまは年に5、6回、札幌のこちらの病院で私と一緒に手術しています。

西尾　ところで北海道がんセンターでは、脳腫瘍の症例数は、年間40～50例です。脳腫瘍は、一般の方には馴染みの薄い病気ですね。

入江　はい。当病院でも年間50例程です。脳腫瘍には良性と悪性があって、良性は①「髄膜種」②「神経鞘腫」③「下垂体腺腫」が代表的です。良性腫瘍の治療では、福島先生から教わった低侵襲の「鍵穴手術」を行っています。この手術は腫瘍だけでなく、未破裂の動脈瘤にも応用しています。

4つの「悪性脳腫瘍」

西尾　良性の脳腫瘍は、一部を除き、全摘でよくなるけれど、悪性腫瘍の方はやっかいですね。

入江　はい。悪性脳腫瘍には①「神経膠腫」（グリオーマ）②小児の「髄芽腫」③「悪性リンパ腫」④「転移性脳腫瘍」があり、①「神経膠腫」については、グレードが「Ⅰ」から「Ⅳ」までであります。

西尾　この場合の「グレード」は、ほかの悪性腫瘍で使われる「ステージ」とは違う。

入江　はい。「ステージ」だと「Ⅰ」から「Ⅳ」は腫瘍の広がりや転移

脳のがんである脳腫瘍について読者の多くは、病名は知っていても内容はほとんど知らないのではないか。とりわけ悪性脳腫瘍は、手術で全摘が難しく、それを支えるのが放射線治療である。

そこで脳腫瘍のスペシャリストである札幌孝仁会記念病院の入江伸介院長に、難解な脳腫瘍の治療についてわかりやすく解説してもらい、放射線治療で注目される陽子線治療についても語ってもらった。

（2023年12月25日、札幌孝仁会記念病院にて収録）

続きは『月刊クォリティ』本誌をご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）